

平成二十八年年度「未来を担う私たちの主張」

入賞作品

〈最優秀賞〉

母の仕事・わたしの夢

春日部市立宝珠花小学校六年

横井 月野

2

〈優秀賞〉

だれかのために

春日部市立備後小学校六年

小川 丈拓

5

みんなを元気に

春日部市立緑小学校六年

藤間 日向

8

私の将来の夢への道

春日部市立立野小学校六年

岡安 もえ

11

五百円のボランティアから

春日部市立南桜井小学校六年

島村 桃菜

14

幸せなつらさ

春日部市立緑中学校三年

佐々木 楓花

16

〈最優秀賞〉

母の仕事・私の夢

春日部市立宝珠花小学校六年 横井 月野

みなさんは、麦わら帽子が春日部の名産品の一つだということをご存じだろうか。むかしから麦の栽培が盛んだったこの地域で生まれた帽子づくり。色もデザインも様々で、見ているだけでウキウキしてくる。この麦わら帽子は、小さいころからとても身近なものだった。なぜなら、わたしの家は家族ぐるみでぼうし工場を営んでいるからだ。

わたしの祖父が社長のよこい帽子工場で、母は専務を務めている。毎日、歩いて五分ほどの会社に八時に出勤し、五時半に帰ってくる。そして家族一緒に夕飯を食べる。食べざかりの中学生の兄に負けないくらい、

『今日もがんばったから。』

と言って食べる。細くて小がらだけど、とってもパワフルな母。あるとき、こんな質問をしたことがあった。

「お母さん、仕事楽しい？」

母は迷うことなく、

「すごく楽しいよ。お客さんが喜んでくれたり、会社の人々と新しい帽子を考えたりするのが、

嬉しいのよ。もちろん、疲れる時もあるけど。」

わたしは、仕事は忙しくつらいものだとばかり思っていた。だから、「楽しい。」という答えを聞いた時、正直とても驚いた。忙しくて大変な時もあるけれど、仲間と乗り越えているんだと気づいた。そして、つらさもプラスに考える母が素敵に思えた。

そういえば、わたしの家の会社には、若い人やベテラン、おじいちゃん、おばあちゃんの世代の人など様々な人が約三十人ほど働いている。いつ行っても、

「お帰り。」

と笑顔で出迎えてくれ、みんな仲良しで楽しそうだ。作るばかりではない。帽子のクリーニングにも力を入れている。汚れたり古びたりしていても、大切な帽子としていねいに洗ぎいやプレスで整え、日本中のお客さんのもとへお返しして喜ばれている。これは祖母の得意な仕事だ。みんな自分たちの仕事に誇りと喜びを感じながら働いている。そんな職場の空気が好きだ。

以前、母が私たち三兄妹にこんな話をした。

「わたしはね、無理に君たちに工場を継いで欲しくは無いんだ。本当に帽子が好きだつて言う人になってほしい。わたし自身、ずっと大切にしてもらえような帽子を心をこめて作っているからね。」

わたしの心に、重く熱い母の気持ちがじんわりと伝わってくるのを感じた。

小さいころは、学校から帰っても、祖母と難しい会社の話ばかりしている母が何となく気に入らなかった。今日、学校であった事を話したいのに話せなかったからだ。でも、このごろは、母がこ

れほどまでに帽子づくりにたましいを込めて、がんばっているんだと気づき、帽子づくりの仕事に興味がわいている。

今のわたしの夢。それは『つらいこともプラスに変えてしまう母のような帽子職人』だ。小さいころは、一切、後を継ぎたいとは考えなかった。でも、母の輝く姿を見てあこがれの気持ちをいだけようになつた。

今日も母は、『春日部の特産品』を全国に広めたいと元気いっぱい仕事に励んでいる。

「がんばれ。お母さん。」

青少年育成埼玉県民会議主催

平成二十八年度 未来を担う私たちの主張(青少年の主張大会)

小学生の部 佳作 受賞

〈優秀賞〉

だれかのために

春日部市立備後小学校六年

小川 丈拓

みなさんの家族は、それぞれ自分の家庭での役割が決められていますか。ぼくは家にいるとき、お父さんやお母さんにいろいろなことを任せられます。例えば、ごみを出すこと、くつを揃えること、机をふくことです。ぼくが何かしているときに言われるので、いつもいやいややっていて、やつてもお礼も言わないので、「何でやらなきゃいけないんだよ。」「めんどろくさいなあ。」と思います。五年生になって家庭科の授業が始まり、家族が気持ちよく生活するために家庭にはさまざまな仕事があることを学びました。ぼくの家では、お父さんやお母さんは、毎日家族のために働きに行き、家庭ではご飯を作ったり、掃除をしたりしています。働きながら家庭の仕事をしてお父さんとお母さんは、ぼくが頼まれてやっている家庭の仕事の何倍も頑張っているということに気づきました。だからぼくも家族の一員として、「自分でできる仕事を家族のためにしつかりやろう。」と思うようになりました。

僕が家の仕事をしてもお礼を言わないのは、「家族として、当たり前前のことをしているからかな。」それとも、「僕が言わないからお母さんもぼくに言ってくれないのかな。」と思いました。

また、お母さんがお水を持ってきてくれたときや何かを買ってくれたときに、ぼくもお母さんに、

「ありがとうございます。お水を持ってきてもらったり、何か買ってもらったりするのは当たり前のことではなく、「ぼくのことを思っていてくれてる。」と思えました。頼まれた仕事でもそうでなくても、だれかに何かをしてもらったら、そのお礼をしっかりと伝えるべきだと考えました。だから、ぼくはお母さんがぼくに何かしてくれたら、「ありがとうございます。」と自分から言うことに決めました。今では、お母さんに「ご飯を持ってきてもらったときには、必ず、「ありがとうございます。」と言います。お母さんはとても喜んでくれます。そして、ぼくが家の仕事をしたときにはお母さんもぼくに、「ありがとうございます。」と言ってくれました。ぼくは、うれしくなり気分が良くなりました。」

家族にはそれぞれの生活があることも家庭科で学びました。だからこそ、家庭でできる自分の仕事を増やしていき、家族みんなで仲良く、明るく、楽しく過ごせるように協力していきたいです。学校でも同じことが言えるのではないかと思います。学校には当番があります。当番の仕事をみんながするから学校生活がスムーズに行えます。また、ぼくたち高学年が委員会活動をする中で、学校のみんなが良い環境で生活したり、楽しく過ごしたりすることが出来ます。仕事だからやってみらって当たり前ではなく、友だちに何かをしてもらったら、「ありがとうございます。」のあいさつを自分からしようと思えました。そうすれば学校のみんなが優しい気持ちでいっぱいになり、温かい雰囲気のある学校になるのではないかと思います。

ぼくは今まで、「任されたからやる。」「仕事だからやる。」という気持ちが強くありました。でも、今は家族や学校の友だちのために仕事をすると、「相手の役に立てる。」「相手を温かい気持ちにすることが出来る。」と思えるようになりました。それは何よりも、「自分のためになる。」と思いま

です。自分にできることを増やしていき、周りの人の様子を見て、行動できるようになっていきたいです。

みんなを元気に

春日部市立緑小学校六年 藤間 日向

「あなたの将来の夢は。」

と聞かれたら、私は、はつきりと

「看護師になること。」

と答えます。将来の夢が看護師と聞くと、一見ふつうかもしれませんが、わたしが将来の夢を看護師に決めたのには理由があります。

私はこれまでに二度、入院したことがあります。どちらも長い期間ではありませんでしたが、熱が出て病院に行くと、症状が重い為入院することになりました。初めての入院のときには、病気になるってしまい体調が辛かったこと、家族とはなれて生活をしなくてはならないことなど、病院での生活がとても不安でした。そんなとき、たくさん助けてくれたのが看護師さんでした。不安そうにしている私をほげまそうと、病気の話はあまりせずに楽しい話をしてくれたり、点てきでは針が見えないようにシールをはってくれたり、私が脱水症状で立てなかつたときには車いすや点てきを持ってきてくれました。夜なかなか眠れないときには、優しく、

「大丈夫。」

と声を掛けてくれ、気持ちが悪く落ち着いたのを覚えています。看護師さんが明るく声を掛けてくれたおかげで、不安でいっぱいだった入院生活でしたが、気持ちが楽になりました。看護師の仕事は大

変そうなのに、どんなときも笑顔で接してくれて、私も自然と笑顔になっていました。そして、働く姿を間近で見るとこの仕事に興味を持ち始めました。けれど、この時はまだ、看護師っていいなと思っただけでした。なりたいたと強く思うきっかけは、おじいちゃんです。

私は去年のつゆの時期におじいちゃんを亡くしています。亡くなった理由はがんです。私はおじいちゃんが入院していることは知っていたけれど、まさかがんとは知りませんでした。薬を毎日飲んでいたので、きつとよくなると思っていました。

おじいちゃんのお見舞いに行ったときに、入院前よりやせ細った体を辛そうに起こしているおじいちゃんを見て、何か私にもできることはないか考えました。病気で体が思うように動かない辛さを私は知っています。辛さを知っているからこそできることがあると思ったのです。私はおじいちゃんも移動するときに点てきを持って、歩くときの介助をしたりしました。元気だったおじいちゃんも病気になることを直に感じ、さびしく、悲しい気持ちになりましたが、おじいちゃんに、「いろいろすまんな。ありがとう。」

と言われ、自分がおじいちゃんの役に立っていることが分かり、悲しみでいっぱいだった気持ちに変化が起きました。私はおじいちゃんが亡くなってから、自分の中にだれかの役に立ちたいと思う気持ちが強くなったように感じます。自分がしたことでも相手に感謝してもらえ喜びを感じました。

みなさんは「病院」と聞くと、こわい、暗いなどのイメージがあり、よい印象を持つ人は多くないかもしれません。でも、私の考える「病院」のイメージは、「たくさんの人がはげましてくれ、元気になれる場所」です。病気を治すために力をつくす医師や看護師。入院している人を心配して

お見舞いに訪れる家族や友だち。それぞれ立場は違うけれど、みんなの気持ちは同じです。たくさんの人の思いが集まって、元気になれる場所だと思います。前までは、将来の夢といわれても特に何も決めていなかったけれど、今は看護師になりたいとはつきり言うことができます。お花屋さん、保育士といくつか候補がありました。初めて「この仕事をした」と思えたのが看護師です。こんな看護師になりたい、看護師になってこういうことをしたいと具体的に思い描くことはまだ、できませんが、看護師になってたくさんの人に元気をあげられる一人になりたいです。

私の将来の夢への道

春日部市立立野小学校六年 岡安 もえ

みなさんは、自分の将来の夢をもっていますか。もっている人もいれば、まだ持っていない人もいます。将来については、色々な思いを人それぞれもっていると思います。これは、私が今、がんばって目指している将来の夢の話です。

私は、幼稚園のころ、テレビで水泳選手が泳いでいる姿にあこがれ、水泳教室に入りました。初めは、頭を水につける練習から始まりました。少しずつですが、できることが増え、水泳にひかれていきました。

そして、八才になったころ、最大のスランプにおちいりました。八才から九才にかけてまったくタイムが伸びなかったのです。私は「このスランプは、絶対にあとで、大きな成果を生む。だからここが踏ん張りどきだ。」と自分に言い聞かせました。しかし、八才から九才にかけて一年間ずっとタイムが伸びず、内心は、不安でいっぱいでした。そんな私を励ましてくれたある言葉があります。それは、

「今は、踏ん張りどきだ。今踏ん張れば結果は必ずついてくる。」
というコーチの言葉でした。伸び悩んで不安でいっぱいだった私の心を前向きにしてくれた言葉でした。

その言葉に励まされ、十才の時に転機が訪れました。一つの大きな大会に出る機会があり、出場

しました。今までの練習でのことを思い出し、無我夢中で泳ぎました。そして、泳ぎきり、掲示板を見ると、驚いたことに、私のタイムは、全国大会のタイムを切っていました。その時の喜びは、今でもはつきり覚えています。あの時、あきらめずに練習を続けてきたからだ。

それから、全国大会に出場するための練習が始まりました。今までの練習とは違い、私の苦手なスタート練習や持久けいの練習まで全国大会のために、色々なことを工夫しました。

全国大会当日、私は、味わったことのない緊張におそわれました。足はガタガタに震え、心臓もものすごい速さで動いていました。私を勇気づけてくれたあのコーチの言葉を思い出し、自分自身を励ましました。そして、ホイッスルの合図が鳴り、スタート台に立ちました。

「よい、ピーツ。」

私は、ゴールだけを目指して、必死で泳ぎました。しかし、全国大会の壁は高く、結果は十七位でした。悔しい気持ちでいっぱいでした。でも、いつか「全国大会で優勝したい」という大きな目標ができました。この日から私は、目標に向かい、今までより練習量を増やしたり、練習メニューを見直したりと工夫しながら練習に取り組むようになりました。

また、この水泳に対する思いは、勉強や陸上大会の長距離の練習にも生きてきました。何事にも簡単にあきらめない精神力や根気強さ、コツコツ努力を重ねる大切さは、あらゆることに生きていくことを感じました。水泳を通して、自分自身を成長させることができたので、それを他方面にも活かしていけるような人になりたいです。

幼いころに、あこがれた水泳選手のような泳ぎがいつかできるよう、そして、全国大会で優勝し、

オリンピックを目指せるような選手になれるよう、日々努力し、夢を実現させたいです。

五百円のボランティアから

春日部市立南桜井小学校六年 島村 桃菜

ボランティア、ボランティア、私はボランティアについて考えたことがこれまであっただろうか。四月十四日、熊本県で地震があった。この地震をきっかけに、ボランティアについて考えてみた。テレビでは、ずっと悲惨な映像が流れていたが、私はただただ見ているだけ。見ていることしかできずにいるんだと、改めて自分を知ることができた。熊本地震が起きて何日かたち、避難所で被災地の小学六年生の女の子がボランティア活動を自ら始め、それにつられて何人かの小学生も一緒に活動している姿が、テレビで取り上げられていたのが心に残った。その小学生が、どんな活動をしていたかというところ、この子自身も被災者なのに、同じように被災している方に、ご飯を配ったり、肩もみをしたり、トイレの水を運んだりしていた。私はその姿を見て、同じ六年生なのにすごいなと思いつつ、心がぎゅゅと痛むような気持ちになった。こんな気持ちは生まれて初めてだった。同じ六年生だから、なおさら気になったんだと思う。私が被災している立場だったら、こんなことができただろうか。きつと今の私なら「地震が怖い、お母さんどうするの、学校にはいつ行けるの、お友だちといっしょ遊べるの、お腹空いた」と、そんなことばかり考えていたと思う。そんな大変で想像もできないことが現実起きているのに、自ら人の役に立つことを考え、実行していたその子は、どうしてそんなことができたのだろうかと思ってしまう。その子はインタビューでこんなことを話していた。

「何もしないでいると、悪いことばかり考えてしまうから、何でもいいから何かしようと思った。勇気を出して始めて良かった。やってみたら、喜んでくれる人がいるから、これからも続けたい。みんなが笑って暮らせるようになるまで続けたい。」

と、このように話していた。これを聞き、同じように十一年間生きている人間として、自分が恥ずかしくなった。

ボランティアという言葉の意味を辞書で調べてみた。「誰もが、自分でできることを、自分の意志で、周囲と協力しながら、無償で行う活動のことをいう。」と書いてあった。この小学生のしている事は、まさにボランティアだ。自分には今何ができるかを考え、お母さんと、すぐに募金しようと話し、近所のコンビニに行き、お小遣いの中から、五百円の募金をした。こんなことしかできなかったが、やって良かったと思った。

そして、もし私の周りで困ったことが起きた時には、今の気持ちを忘れずに、その時できることを、自分の意志で行動できる自分でいたいと思った。私のお母さんは寝る前に、

「今日も無事に終わったね。感謝して寝よう。」

と、口ぐせのように言う。今までは、聞き流していたけれど、最近ではその言葉の意味が、少し理解できるようになった。

私は女子バスケットボール部に入っています。私が二年生の頃の一年間、私は「つらかった」です。

私は一年生のとき、小学校の頃からやっていたバスケットボールをさらに上達させたいと思い、入部しました。しかし、色々なことから入部したのは、私一人だけでした。初めは私一人だけで一年生の仕事が務まるのだろうか、私一人で先輩方とうまくやっていけるのだろうかという不安と焦りがありました。しかし、先輩方が優しく話しかけてくださったり、仕事も一緒に手伝ってくださいたりしました。少し気持ちが楽になり、また次の年には一年生が入ってくれるだろうと考えていました。

しかし、次の年に入部したのは、一人だけでした。チームとして試合に出場できないことが悲しいのは当然のことですが、なにより入部してくれた一年生に申し訳ない気持ちでいっぱいでした。夏を越すと三年生も引退し、一年生と二人だけの活動となりました。

普段の練習は、男子バスケットボール部と合同になりました。男子バスケット部の練習は、女子の私達にとって「つらい」ものでした。なぜなら、その練習のほとんどが筋肉トレーニング中心のメニューだったからです。男子と女子ではスピードやボールの飛距離において差があり、ついていくのがやっとでした。

また、たまにある練習試合では、対戦チームの二軍と合同で試合を行いました。しかし、なかなかコミュニケーションがとれず、試合中でも息が合わないことが、どうしても多くなりました。男子バスケット部の練習と、他中との合同練習の狭間でリズムがつかめず、悩みました。約一年間、そんな時間ばかりが流れていました。

私は三年生へと進級し、新学期が始まりました。新一年生の仮入部期間も始まりました。私はい入部する部員もいないだろうと諦めていました。

予想に反して、仮入部期間では多くの一年生が見学に来てくれました。けれども私は、

「仮入部はたくさん来てくれたけれど、どうせ入部してはくれないだろう。」
と思っていました。

いよいよ本入部の日。

前の日から私は緊張していました。もし一人も入部してくれなかったら、自分の最後の大会に出場できないという恐怖心が胸いっぱい広がっていました。

放課後になり、不安と少しの期待をもって体育館に向かいました。すると、入部届けを持って何人も一年生がやって来てくれたのです。いよいよチームを持てる、チームとして大会に出場できるといふ嬉しさのあまり、涙が出そうになりました。

二年生だった頃の「つらさ」を乗り越え、大勢の一年生部員の部長となり、試合もできるようなったのです。「つらさ」を乗り越えて、本当によかったと思います。

今は、何人も一年生に一人で教えることや、練習試合では自分で指示を出しながらチームを動

かさねばならず、大変は大変ですが、二年生の頃の「つらさ」とは違います。本当に「つらい」一年があつたからこそ分かる、幸せな「つらさ」だと思っています。

この経験で、どんなに「つらく」ても逃げないこと、決して諦めない気持ちをもつことが大切だと実感しました。また、部活動を「みんなのできる」ということは「みんなで乗り越えられる」ことだと思えます。仲間の大切さも学びました。当時は、「もう嫌だ」としか思っていなかった「つらさ」でしたが、今は自分のためになる大きな経験へと変わりました。

これから、もつと大変なことを経験すると思いますが、諦めず、負けずに立ち向かっていきたいと思えます。その「つらさ」は必ず報われるからです。